

こころ、からだ、いのち

中野 重行

国際医療福祉大学大学院 創薬育薬医療分野 教授 /
大分大学医学部 創薬育薬医学 教授

連載⑤

「かた(型)」に「ち(血)」を通わせて、
自分の「かたち(形)」をつくる!
医療の技能(スキル)だけでなく、
芸ごと・スポーツなどにも共通する上達のコツ

●医療コミュニケーション教育との出会い

最近、医学・歯学・薬学を中心とした医療教育の分野では、「医療コミュニケーション」の教育が盛んになっています。知識だけでなく、「医療面接(メディカルインタビュー)」という技術力の向上が教育カリキュラムに組み込まれ、客観的臨床技能評価試験(Objective Structured Clinical Examination, OSCE)により評価するようになってきました。そのために、患者役を演ずる模擬患者(Simulated Patient, SP)の養成が必要になり、各地でSPの勉強会やワークショップが開かれています。筆者もこの10年来、主として医学生・研修医・薬学生の医療コミュニケーション教育に携わってきました。また、大分と東京だけでなく、各地で開催される医療コミュニケーションを学ぶワークショップの企画運営や模擬患者の育成に協力しています。今回は、医療コミュニケーションを学ぶ際に、多くの学生と教職の方々、ときにはSPの方が直面している悩みとその解決のための考え方を語ってみたいと思います。

私は内科医として臨床医の道を歩み始めましたが、幼い頃から心の動きに関心が高かったこともあり、「こころの扱える医師になりたい」という想いを抱いていました。その夢を実現するために、当時、わが国に誕生したばかりの心身医学の領域に進みました。そこで臨床経験を積んでいくうちに、自らの心身医学的ア

プローチの効果を評価したいと感ずるようになってきました。しかし、心身医学的治療では、心理的なアプローチはもちろん行いますが、併用して向精神薬も使います。主として抗不安薬や抗うつ薬です。そこでまず、これら併用薬の効果の臨床評価法を学んでいるうちに、臨床薬理学の領域に深入りするようになったのです。1989(平成元)年から大分医科大学に臨床薬理学教授として赴任しましたが、附属病院の臨床薬理センターでは薬物治療に関するコンサルテーションを行うとともに、当時、心身症を診療するスタッフが、大分医科大学にいなかったこともあり、また、筆者が日本心身医学会認定医と指導医でもあったこともあり、周囲から求められる形で、この臨床薬理センターの中に心身症外来を設けて診療も行うことになりました。そのうちに心身医学に関心を抱く若い医師や臨床心理士が集まってきて、大分県内における心身症センターをも兼ねるような雰囲気になっていました。したがって、臨床薬理学を専門としている筆者が、医療面接教育の責任者を務めるようになって、ごく自然な流れの中にあつたことになりました。

●「稽古」としての医療面接教育

さて、今回の本題に入りましょう。医療コミュニケーションの学習・教育の場において、しばしば遭遇する質問として、OSCE対応の医療面接があまりにも臨床の現場での面接とかけ離れたものになっているのではないかという戸惑いが、語られることがあります。これは、教師の側からも、模擬患者の側からも、ときには医学生を含む医療者の側からも出される質問です。私は、この種の質問には以下のような考えを持ってお答えしてきました。その考え方のさわりの部分を、語ってみたいと思います。

何事においても、上達のコツは、まず「かた(型)」を学ぶこと、その「型」に自分の「こころ、つまり、

ち(血)」を通わせて、「かた+ち=かたち(形)」にすることにあります。OSCE対応の医療面接は、その「型」を学ぶことに対応しています。早く「型」を身につけて、それに自分の「こころ」を通わせて、自分の「形」をつくるのが大切です。その際には、まず「型」と「形」の違いを意識することが、最初のステップになります。「型」はお辞儀や服装のようなものです。しかし、「型」は「ち(血)」が通わないと「形」にならないのです。「ち」は血(ち)ですが、乳(ち)でもあり、また霊(ち)でもあり、とても重要なものの意でもあります。「型」に自分のこころ(血)が通って、初めて自分の「形」が出来上がるのです。

「生け花」「茶の湯」「書道」「琴」などの練習には、「稽古」(昔のことを考えるの意)という言葉を使います。なぜなのでしょう。これらの伝統技芸には、古くから伝えられた「型」があつて、その「型」から入っていくからなのではないでしょうか。その意味では医療コミュニケーションの学習も、「稽古」として身につけるつもりで対応すると、上達も早いように思います。

●基本的な「型」を身につけ、自分の「形」を育てる

筆者の高校(岡山朝日高等学校)時代には、柔道の授業は、まさに稽古でした。柔道の基本的な「型」を徹底して身につけてからでないと、試合はさせてもらえませんでした。しかも、技をかけて投げられたときの受け身の「型」を徹底して身につけることに長い

時間を費やしました。失敗をしない訓練ではなく、失敗した際に怪我をしないための受け身の「型」の稽古を重視しているということは、わが国の古来から伝わってきた柔道という道のすごい「知恵」なのだという気がします。

よく考えてみると、「言葉」も「型」の一種と考えることができます。私共は、伝えたいイメージをメッセージとして相手に伝える際のツール(つまり「型」)として言葉を使っているのです。日本人は「日本語」で、米国人は「英語」で、中国人は「中国語」でメッセージを伝えようとしているのです。そして、日本人である私共は、日本語という言葉の中でも、特に自分の使いこなせる語彙を使って平素のコミュニケーションを図っているのです。

「さむらい」の域に達しているイチローのバッティングスタイルを例にとり説明すると、もっと分かりやすくなるかもしれません。イチローは子供の頃から徹底してバッティングの基本的な「型」を身につける稽古(つまり、素振りとバッティングセンターでの打撃練習)を繰り返し、その延長線上に、イチローの実戦で磨き上げられたバッティングスタイルである現在の「形」が生まれたのです。イチローを目標にする後輩は、イチローの現在の「形」をただまねようとするのではなく、バッティングの基本的な「型」を身につけた上で、イチローがしたのと同じように、自分自身の「形」を見つけ出して育てる努力を重ねていくことが重要なのではないのでしょうか。



(http://www.s-hoshino.com/)

なかの・しげゆき 岡山大学医学部
卒。大分医科大学教授、同附属病院
臨床薬理センター長、大分大学医学部
附属病院長、大分大学学長補佐などを
歴任。大分大学名誉教授。日本臨床薬
理学会元理事長、日本心身医学会認
定医・指導医、日本臨床薬理学会認
定医・指導医、日本内科学会認定医、
日本学術会議連携委員、日本心身
医学会評議員、CRC連絡協議会代
表世話人。「医療コミュニケーション
の集い」のための「響き合いネット
ワーク」(大分、岡山、東京、長崎)
の企画・運営に携わっている。

